

＜日本イギリス哲学会 第72回関西部会例会 報告要旨＞

報告1：思想史学におけるケンブリッジ学派の影響を考えるために —近代イギリスを中心とする社会思想史研究を事例に—

竹澤 祐丈

本発表は、ケンブリッジ学派の思想史研究の方法論が私たちの研究に与えた影響について、近代イギリスを中心とする、狭義の社会思想史研究を事例に考察すると同時に、今後の思想史研究の展開の方向性を探ろうとするものである。この素材的な限定は、独仏を素材とする豊かな研究蓄積や隣接分野の営為を軽視する意図からではない。むしろこの設定は、本報告の射程を示すと同時に、議論の焦点を絞り込むことによって、問題の所在をより深く共有したいと考えるからである。

その目的のために、本報告の導入では、ケンブリッジ学派とはどのような集団であるのかに関して、報告者自身の参与観察的な考察を交えつつ、知識社会学的に振り返ってみたい。通常理解によれば、ケンブリッジ学派とは、様々な文脈（コンテキスト）との関係で思想を分析する集団とみなされ、具体的な研究者としては、Q・スキナー、J・ダン、J・G・A・ポーコックが、時には、I・ホントや J・ロバートソン、さらには彼らのケンブリッジ大学での同僚や弟子筋までが挙げられることもある。この予備的な考察では、彼らからの影響を語る際には、まずは伸縮自在に語られる傾向が強いケンブリッジ学派とはだれなのかの把握が、意外なほど重要である点を確認したい。そして彼らの共通性は、思想の受容史的な分析と呼ばれる点に見出すことができることを強調したい。

その作業を踏まえて、本報告の大部分では、ケンブリッジ学派の方法の特徴は、（通常注目される）上記の共通性の観点だけではなく、どのような思想の受容史だったのか、すなわち**論点や素材の特徴の観点**からも論じられるべきことを主張したい。すなわち、この点での変化の有無が、ケンブリッジ学派の影響を語る際には**より重要でより効果的な**観点ではないかと思料するのである。

これらの考察に基づく報告者の結論は、ケンブリッジ学派からの影響と呼ばれる内容の大半は、主として、日本と英語圏（≠米語圏）における思想史研究を巡る学問分野の布置関係の相違に起因するものであり、したがって彼らからの本質的な影響は、現時点では、むしろ限定的だったとみなすべきではないかという解釈である。この結論は、通常理解とは大きく異なる論争提起的なものと自覚するので、当日は、可能な限り丁寧に議論を展開したい。

また、本発表は、2024年度社会思想史学会 研究大会「幹事会企画」（2024年11月開催）のために準備した内容と重なる部分があるが、そのセッションでのやり取りを踏まえて、特に、彼らが重視する歴史研究の意味に関する議論をさらに展開しようとするものである。

（たけざわ ひろゆき・京都大学）

報告 2 : J. S. ミルの欲求充足説解釈

臼井義貴

本報告では、ミルの福利の理論について、欲求充足説解釈の擁護を試みる。ミルは快樂には強さ・持続性の違いだけではなく、質の違いもあると主張する。また、一方では重要なのは快樂のみに限られるとしつつも、他方では音楽・健康といった快樂以外の事物もそれ自体として重要だと主張する。近年のミル研究では、こうした主張の統一的な理解を可能にする原理を巡って、盛んに議論が行われている。例えば、快樂説解釈は、ミルの主張は全て快樂の促進の観点だけから説明できるとする。また、完成主義解釈では、ミルにとって、人々の福利を構成するのは高級な能力の発展・行使することそれ自体であり、必ずしも快樂に限られるものではないとする。本報告では、福利は「本人が十分な経験を積んで熟慮するならば欲求するものの実現」だという解釈を提示する。

まず、「高級な快樂」と「有能な判定者」に関するミルの主張を整理する。ミルの観点では、高級な快樂と低級な快樂のどちらも知っている有能な判定者は、次のような選好を示す。質の高い快樂は、もし量が同じならば、質が低い快樂よりも強く選好される。また、質の低い快樂であっても、量が十分に大きければ、質の高い快樂よりも強く選好されることがありえる。ただし、有能な判定者は、人生全体については、高級なあり方を低級なあり方よりも必ず強く選好する。この整理を踏まえて上で、快樂説解釈と完成主義解釈には、それぞれ問題点があることを示す。快樂主義解釈では、より満足が小さい状態がより大きな福利をもたらしうる点を説明することが困難である。また、完成主義解釈では、感覚を持った主体のみが福利主体である点を説明することが困難である。

そこで、これらの問題点を回避する立場として、欲求充足説解釈を検討する。欲求充足説解釈には、重大な難点があるとされてきた。この点を、エライジャ・ミルグラムの解釈を通して確認する。ミルグラムの立場は、有能な判定者が欲求するものの実現を福利だとする解釈である。だが、有能な判定者の欲求は、何が福利であるのかの証拠でしかなく、それ自体が福利を構成するわけではない、と考える十分な根拠がある。報告者は、この問題を受け入れつつ、福利を構成するのは有能な判定者ではなく、本人の欲求だと主張する。また、その欲求は必ずしも現実の欲求ではなく、「本人が十分な経験を積んで熟慮するならば」という条件を付けるべきであることを示す。

最後に、欲求される具体的な事柄について検討し、ミルが多くのところで行っている主張とこの解釈が合致することを示す。例えば、もともとは快樂のための手段でしかなかったものも、観念連合によって、それ自体として欲求されるようになる。また、快樂の小さい高級なあり方が、快樂の大きい低級なあり方よりも強く、それ自体として欲求されるのは、人間が心理的事実として「尊厳の感覚」を持っているからであると説明することができる。以上の考察を踏まえ、ミルの福利の理論は欲求充足説であると考えることがもっともらしいと主張する。

(うすい よしき・名古屋大学)